

# 池波正太郎「剣客商売」における語り

松本 修

## はじめに

池波正太郎の作品は、生きるということの意味をありありと感じさせてくれる滋味あふれる文学として親しまれ、読者を魅惑している。今も文庫本は次々と新装版を出して新たな読者を獲得している。若い女性が蕎麦屋で酒を飲む「池波正太郎ごっこ」を生むくらい一種の「現象」ともなっている<sup>1)</sup>。池波文学の魅力は、その自在な語り口に拠っているということもまた論をまたないところであろうが、改めてその語りの仕組みを解きほぐしてみたい。これはまた、語りの分析が読みの分岐点を見定める一つの方法であると同時に、文体的な特徴、文体的な魅力を分析するための方法ともなることを示す試みである。

## 「品川お匙屋敷」のテキスト分析

「剣客商売」のうち、新潮文庫版では第6巻『新妻』に収められている「品川お匙屋敷」<sup>2)</sup>を分析の対象テキストとして、冒頭から流れを追って分析する。

### テキスト1

ちかごろの佐々木三冬は、父・田沼意次の上屋敷へ滞留することが多く、

「お嬢さまは、この老いぼれが嫌いになったのでござりましょうよ」

と、根岸の寮（別荘）で留守居をしている老僕の嘉助が、和泉屋方へあらわれて、大いに、  
「暮した……」

そうである。

下谷・五条天神前にある書物問屋〔和泉屋〕は、三冬の生母おひろの実家であり、当主の吉右衛門は、三冬の伯父にあたる。

三冬は妾腹の生れだけに、母亡きのちは、田沼の家臣・佐々木又右衛門の養女とされたが、のちに田沼夫人の怒りも解けて、江戸へ呼びもどされた。

しかし、三冬は、実父の田沼をうらみ、生母の実家・和泉屋の寮で、老僕と共に暮らしつつ、井関道場へ通いつめ、

「何も彼も、哀しいことを、いっさい忘れよう……」

として、少女のころから、剣術へ熱中したのであった。

「お嬢さまは、この老いぼれが嫌いになったのでござりましょうよ」というせりふは、嘉助のせりふである。このせりふは「と、」という引用表示に受け止められている。語り手は作中人物をすべて名前などの三人称の呼称で基本的には呼んでおり、物語内容の世界

から超越的な語り手としての立場から作中人物の行動や知覚・思考を描く構造であるが、この場合、そうした語り手が嘉助のせりふを引用しておきながら、嘉助が零したということもまたカギ括弧に収められ、「零した……」というふうになっている。この「零した……」は作品全体のカギ括弧の使用法からしてほぼせりふの引用として把握される。となると「零した……」と言っている人物は和泉屋の当主、吉右衛門ということになる。そうすると、語り手は、吉右衛門が誰かに対して、嘉助の口説きを伝える場面を受けてこの出来事を語っていることになり、既に語りの現在は、続いて分析する【テキスト2】での嘉助と吉右衛門の会話の場面をすぎて、より時間的には後の吉右衛門と誰かの会話の後という時点に設定されていることがわかる。この【テキスト1】の時点では架空の未来的な会話は、本文中に求めるならば、【テキスト3】における、「吉右衛門から嘉助のことを聞くや、」というところに現れている吉右衛門と三冬の会話ということになろう。つまり、【テキスト3】の場面で、省略されてはいるが、「嘉助が「お嬢さまは、この老いぼれが嫌いになったのでござりましょうよ」と零した……」というような言葉が吉右衛門から三冬に漏らされたということになる（零した……の……については、語り手による省略ともとれるし、吉右衛門による言いさしともとれる）。語り手は少なくともその時点より後に語りの現在を置いて、回想的にこの物語を語るという構造になっている。その意味でも語り手の超越性は高い。これは池波の時代小説にほぼ共通する特徴である。しかも、それは「そうである」ということになっており、全知の語り手があたかも人づてにこのことを聞いたかのような仕掛けになっている。このことにより、語り手は「伝聞」という経路を経て物語内容を知るという意味で「人格性」を獲得するとともに、物語内容の世界に一種の距離を置くことになる。ここに一種のゆとりが生まれることになるのであろう。

以下、語り手は佐々木三冬の生い立ちなどを説明する。その中で、〔和泉屋〕の〔 〕表記は、書き手が読み手に親切に理解を助ける表記を用いているというメッセージを副次的に伝える。「父・田沼意次」などの「中黒」（「・」）、「生母おひろ」の傍点も同様である。このことによって、書き手「池波正太郎」という人格性を帯びた「語り手」が生身の読者に憑依する「読み手」に現前することになる。この作者人格との対峙という状況も、池波作品の読者にとっては大きな魅力ということになるのであろう。

「何も彼も、哀しいことを、いっさい忘れよう……」という引用は、「として」という引用表示に受け止められており、語り手の文脈への引用として位置づけられているが、本来は三冬の独り言なのか心中思惟なのかは明らかではない。他の部分のテキストでは、心中思惟は基本的に（ ）で囲まれており、独り言である可能性、しかも繰り返し発されたものである可能性が高い。いずれにせよ、語り手の全知性を高める効果をあげている。この言葉は、「として」という語り手による補いによって地の文に接続される（つまり「いっさい忘れようとして剣術へ熱中した」というつながりとなる。）が、そこでは、このせりふは三冬の少女の頃（この物語内容の時点では三冬はすでに二十二歳である）の言葉とされており、そのためよけいに語り手の全知性は高まる。ただ、この連作物語「剣客商売」では語り手は大治郎の父秋山小兵衛の人生をほぼ把握しており、しかも語り手はしばしば小兵衛の最期を知っていることをほのめかすわけであるから<sup>3)</sup>、そういう意味での全知性は連作の中では当然のこととして読者には受け取られることとなる。

## テキスト2

「いや、嘉助さんや。ちかごろの三冬さまは、伯父の、私の顔も忘れてしまったらしい」

和泉屋吉右衛門は、そういつて嘉助をなぐさめた。

「さようで。こちらへも、お見えになりませぬか？」

「ここへ見えたなら、そちらへもまいられよう。ここから根岸は目と鼻の先じゃ」

「そりゃ、まあ、そうでございますねえ」

「ちかごろは、ずっと、御上屋敷においでなさるようだよ」

と、和泉屋は、わが血を引いた姪ながら、老中・田沼意次の子でもある佐々木三冬へ対し、敬った言葉づかいをくずそうとはせぬ。

「いったい、何でまた、そんなに御上屋敷がいいのでござりましょうかね？」

「御屋敷内へ、田沼様がお設けになった道場で、稽古がさかんらしい。ほれ、お前さんも知っている秋山の若先生が、時折、お見えになり、そりゃもう、ずいぶんと激しい稽古をなさるそう。それで三冬さまも、おもしろくてたまらないのじゃないか」

「こっちは、さっぱり、おもしろくありません」

「よし、よし。それでは、二、三日中に、私が御屋敷へ行き、様子を見て来よう。ちょうど、お納めする書籍もあるので、な」

「よろしく、お願いします」

さびしげな嘉助の老顔が、いくらか救われたようになり、根岸へ帰って行った。

最初のせりふは、「そういつて」と引用表示で支えられているが、その返事の「さようで」以降、カギ括弧のせりふのみが連続して対話が描かれる。これは引用表示をしなくても吉右衛門と嘉助の対話であることが既に理解できるからでもあるが、対話そのものの現前性は高まり、読み手が物語内容の場面に臨在するような印象になる。「と、和泉屋は」以降は語り手が介入して解説を加えている。「わが血を引いた」という「わが」は一人称ともとれ、そう解釈する場合は吉右衛門の心中思惟が描かれていることになるが、再帰的用法と解釈すれば語り手の側からの解説ということになる。「敬った言葉づかいをくずそうとはせぬ」の「せぬ」という文末は、作中人物のせりふとの文体的類似性が高く、語り手が作中人物に近づいた印象がある。物語内容の世界に語り手も人格性を持って存在する、あるいは語り手が物語内容の人物の人格性を受け継いで語りの場にあらわれる、というような印象である。これも読み手の物語内容への臨在性を高めている。

## テキスト3

それから半刻ほどのちになって、

「伯父さま、無沙汰をつかまりました」

佐々木三冬が、颯爽と和泉屋にあらわれた。

例のごとき若衆鬘の男装で、紅藤色の小袖に茶字<sup>ちやうじま</sup>縞の袴。四つ目結<sup>ゆい</sup>の紋をつけた黒縮緬の羽織。細身の大小を腰に、絹緒の草履という姿<sup>いでたち</sup>なのだが、

(おや……?)

奥の間へ招じ入れながら、和泉屋吉右衛門は、これまでの三冬にはなかったものが、その容姿に感じられ、

(三冬さまは、どこか、お変わりになったような……?)

どこが、どのように変わったかといわれれば、和泉屋も即座にはこたえかねたろうが、強いていえば、以前の三冬は、わが姪ながら、

(男か女か、わからぬような……)

おもいがしたものだ。

それが今日は、両刀を帯していささかもたじろがぬ、身についた男装でいながら、まぎれもなく三冬に若い女を感じたといったらよいであろう。

以前ならば、日暮れも近い時刻だし、

「伯父さま、伯母さま、お腹が空きました」

と、夕飯のさいそくをし、臆面もなくぱくぱくと、御飯を三杯もおかわりをする三冬なのだが、吉右衛門から嘉助のことを聞くや、

「さようでしたか……それは、嘉助にも、すまぬことをいたしました」

やさしげな口調でいい、

「今夜は根岸へ泊ります。明日、帰りがけに、また、立ち寄らせていただきます」

すぐさま、腰をあげ、辞去して行ったのを見送り、和泉屋吉右衛門が妻のお栄に、

「見たか、三冬さまを……」

「どうか、なさいましたか？」

「いや……きれいになられた、と、おもわないか？」

「そういえば……はい……」

「まさかに、好きな男ができたわけではあるまいが……」

いいさした吉右衛門が「あ……」と、口を開けたまま、うなずいた。

「どうなさいました？」

「うんにゃ、なんでもない……」

このとき、吉右衛門の脳裏に浮んだのは、ほかならぬ秋山大治郎の顔だったのである。

(そ、そうか……秋山の若先生が、三冬さまの……)

そのころ、佐々木三冬は、上野山下から車坂の通りへ出ている。

ここでは心中思惟が( )で引用される。「奥の間へ招じ入れながら、和泉屋吉右衛門は、これまでの三冬にはなかったものが、その容姿に感じられ、」という解説を間に挟むことによって、(おや……?)という心中思惟と、(三冬さまは、どこか、お変わりになったような……?)という心中思惟が一連のものであることが示されている。英語などの会話の引用システムに近い。となると、(おや……?)の「……」は、「おや? 三冬さまは」と続くことを中断することを示しているともとれるし、単なる間を示しているとも言える。いずれにせよ、吉右衛門の心中思惟を語り手が把握し、語り手の立場から解説がほどこされ、引用が統御されている。

「どこが、どのように変わったかといわれれば、和泉屋も即座にはこたえかねたろうが、強いていえば、以前の三冬は、わが姪ながら、」の部分では「和泉屋」という三人称が用

いられながら、「わが姪ながら」という形で一人称も用いられている。これは、(男か女か、わからぬような……) という心中思惟に、引用後の「おもいがしたものだ。」もあわせ、「わが姪ながら、男か女かわからぬようなおもいがする」というような補いが行われている。ここにも語り手の統御が強く示されている。そして強く統御しながら、和泉屋の心中思惟が直接に提示されているという臨在性を高めている。「それが今日は」という表現も吉右衛門の心中思惟の続きとして読める可能性を高めている。つまり、「強いていえば、以前の三冬は、わが姪ながら、男か女か、わからぬようなおもいがしたものだ。それが今日は、両刀を帯していささかもたじろがぬ、身についた男装でいながら、まぎれもなく三冬に若い女を感じた」という一続きの心中思惟が引用されているという側面があるのである。

「いいさした吉右衛門が「あ……」と、口を開けたまま、うなずいた。」というところでは、直前の「あるまいが……」の……がいいさしであることが示されたあと、他のせりふとは異なって「あ……」は改行を含まずに引用され、地の文に組み入れられる。これも説明がせりふの場面性に優先するというような意味で、語り手の統御を示すことになる。

「このとき、吉右衛門の脳裏に浮んだのは、ほかならぬ秋山大治郎の顔だったのである。」は、「のである」という解説的な文末にも見られるように、語り手の解説であるが、「このとき」というように時間指示が行われており、物語内容の時間、空間に臨在する形で解説が行われている。しかし、(そ、そうか……秋山の若先生が、三冬さまの……) という心中思惟を挟んで、「そのころ、佐々木三冬は」というように、物語内容の空間を転じた場合には「その」という形で時間指示が行われており、物語内容の世界への臨在よりも、物語言説としての性格が強くなっている。このように語り手は自在に両方の世界との距離を伸縮させている。

#### テキスト4

今日は、田沼屋敷の稽古日ではない。したがって大治郎の顔を見てはいないのだが、昨日は田沼邸内の道場で、大治郎と共に家来たちへ稽古をつけてやった三冬なのである。

(ああ、もう……たった一日、会わぬだけなのに、どうして、私は、このような……)

居ても立ってもいられぬ気もちになってくるのが、われながら、

(あさましいこと……)

だと思ふ。

(大治郎さまも、私の胸の内が、わかっていて下さるように、おもえるのだけれど……)

ところが、秋山小兵衛にいわせると、

「大治郎も三冬どのも、二人そろって朴念仁ゆえ……」

らちがあかぬのだろうか。

二人とも、おのれの胸の内を打ち明ける術を知らぬ。

それとも一方的に、三冬が大治郎へ想いをかけているのだとしたら、幼少のころから男同様の立居ふるまいをつづけて来た三冬だけに、たとえ、ことばには出さずとも、女の愛情をどのように顔や姿で表現したらよいのか、それをおもうと絶望的になってくるのだ。

(そもそも道場で、大の男を叩き伏せている私を見ては、大治郎さまも、これが女かと、おもわれるのもむりはない)

のである。

「これ、しっかりせぬか。もっと、おもいきって立ち向ってまいれ!!」

とか、

「そのような太刀筋で、いざというときの御役にたてるか!!」

などと、あられもなく大声に叱りつけつつ、木太刀を揮う自分を見ては、大治郎も、(興ざめとやらを、なさるにちがいない。ああ、嫌なこと。いっそ、剣術などを捨ててしまおうか……)

などと、日毎におもうことをくり返しては、おもい悩みつつ、歩む佐々木三冬が、急に、はっとなり、振り向いた。

「今日は」「昨日は」として物語内容の世界におけるダイクティックな時間指示が行われている。でありながら、「なのである」という解説的な文末によって、語り手が強く介入している。以下、(ああ、もう……たった一日、会わぬだけなのに、どうして、私は、このような……) という三冬の心中思惟を引用しつつ、「居ても立ってもいられぬ気持ちになってくるのが、われながら、」という形で「われながら」という補いが行われる。「われながら」は、再帰的用法とも解釈できるが、一方で、「ああ、もう……たった一日、会わぬだけなのに、どうして、私は、このような居ても立ってもいられぬ気持ちになってくる(のだろう。それが)われながら、あさましいことだと思う。」というような一続きの心中思惟として理解することができる。

語り手は転じて「大治郎も三冬どのも、二人そろって朴念仁ゆえ……」という秋山小兵衛のせりふを引用するが、いいさしの……を補う形で、「らちがあかぬのだろうか。」という疑問が地の文で提示される。語り手は小兵衛のいいさしを「朴念仁ゆえらちがあかぬ」と補いながら、「のだろうか」と語り手自らの疑問を提示する。自在に作中人物のせりふや心中思惟を引用し、ダイクティックな時間指示によって物語内容に臨在しながら、語り手独自の人格性をあらわし、物語言説の側からの統御も強いのである。

「それとも一方的に」以下の一文では、「三冬が」という三人称による解説的な地の文でありながら、「それをおもうと」という形でこの内容が三冬の心中思惟の内容であることが示されている。そのあと、(そもそも道場で、大の男を叩き伏せている私を見ては、大治郎さまも、これが女かと、おもわれるのもむりはない) と三冬の心中思惟が直接引用され、しかし直後、「のである。」という受け止め方がなされている。これは、「むりはないのである。」というつながりを想定しているものであり、引用の主体としての語り手が前面に出ている形である。また、「あられもなく大声に叱りつけつつ、木太刀を揮う自分を見ては、」の部分では、「自分」という一人称が使われている。これは再帰的な用法ではないと考えられる。すると、続く心中思惟とあわせて、「あられもなく大声に叱りつけつつ、木太刀を揮う自分を見ては、大治郎も、興ざめとやらを、なさるにちがいない。」と一続きの心中思惟となっていることを示しているものと思われる。この心中思惟の内容は、実は「これ、しっかりせぬか。」というせりふにまで遡れる可能性が高い。つまり「」のせりふも、心中思惟の中になかば引用されているものと考えられる。つまり、「そもそも道場で、大の男を叩き伏せている私を見ては、大治郎さまも、これが女かと、おもわれ

るのもむりはない。『これ、しっかりせぬか。もっと、おもいきって立ち向ってまいれ!!』とか、『そのような太刀筋で、いざというときの御役にたてるか!!』などと、あられもなく大声に叱りつけつつ、木太刀を揮う自分を見ては、大治郎(さま)も、興ざめとやらを、なさるにちがいない。ああ、嫌なこと。いっそ、剣術などを捨ててしまおうか……』という一続きの心中思惟として理解することが可能である。池波作品では、記号類が多用され、心中思惟やせりふが截然と整理されて提示されているようであるが、実際には地の文も含めて互いに浸透しあうような表現が多いことがわかる。このことによって、語り手は人格性を獲得し、読み手に語りかける語りの場を形成し(読者にとっては作者との親しい対面の感覚を持つことになる)、それでいながら物語内容の場に臨在してありありと出来事を目の当たりのこととして語ることになる。この二つの一見背反することがらが一挙に成し遂げられているということになるのであろう。

### おわりに

次のような箇所がある。

昼ごろになって……。

大治郎と弥七が、打ち合わせておいた場所で落ち合った。神田橋門外の三河町二丁目にある〔東玉庵〕という蕎麦屋の二階座敷だ。

ここは三年ほど前に開店した、しゃれた構えの蕎麦屋で、磯浪そばというのが名代だそうな。粗粉を除いた蕎麦粉を細く上品に打ったものへ、もみ海苔をかけたのがそれで、何のことはない、現代のざるそばなのだが、それでも当時はめずらしかったのであろう。

弥七も、朝は、あまり食べていなかっただけに、大治郎があらわれたとき、威勢よく磯浪そばを手繰りこんでいた。

語り手は「ここは」という指示語によって物語内容に臨在しながら(もっともこの「ここ」は文脈指示とも言えるが)、「だそうな」という伝聞の形で人格性を現す。この人格性は「何のことはない、現代のざるそばなのだが、それでも当時はめずらしかったのであろう。」というように、語り手が現代人であり、語りの場が一挙に読者の側に近づくことで、より作者に近いものとして現れる。このような作者像を帯びた語り手の登場は、池波文学ではしばしば見られ、一見物語内容を破壊しかねないこの逸脱が読者にとっては魅力であったりする。つまり池波文学にあっては、物語言説が語り手によって直接提示されている感覚が強く現れつつ、一方で物語内容の世界がその語りの力によって臨在的に立ち現れるということになっているのである。ここに池波文学の魅力があるわけであり、だからこそ作者の行きつけの店に通ったり「池波正太郎ごっこ」をしたりする読者が現れるということになるのであろう。

読者によって、より語り手との対話性を重視し、語り手の統御によるものとしてテキストを読む読み手と、物語内容の臨場感を重視し、物語の場面展開を中心としてテキストを読む読み手とに、傾向としては分かれるであろう。ここで指摘したような両義的な語りの

特徴は、そうした読み手の解釈特性を分ける分岐点として把握することができる。しかし一方で、その両方の読みが可能な語りの構造を持っているからこそ、そして語り手の人格性と統御を強く読むことができるからこそ、池波文学は読者を惹きつけるのである。

まつもと・おさむ 上越教育大学学習臨床講座

参考文献 池波正太郎ほか 『剣客商売読本』 新潮文庫 2003

---

\*1 常磐新平「解説」(池波正太郎『剣客商売 浮沈』 新潮文庫 1998) p.262 には、次のように書かれている。

没後にいっそう作者は読まれるようになった。女性の読者が増えた。聞いた話であるが、若い女性が二人、蕎麦屋で酒を飲んでいて、なぜ蕎麦屋で飲むのかと彼女たちにたずねたところ、「私たち、池波正太郎ごっこをしているの」という返事だったという。こうした話は実際に見聞される。旅行ガイドなどに記事が載ることにもよるのであろうが、池波正太郎ゆかりの店には特に、こうした若い女性客が増えているようだ。たとえば信州上田でも真田太平記館から「刀屋」にまわって、地酒を飲んで蕎麦を食べて帰る若い女性客が多い。

\*2 池波正太郎 『剣客商売 新妻』 新潮文庫 1990 pp.57~108. テクスト引用は「一」と章立てられている箇所から一部省略して行った。

\*3 常磐新平「解説」(池波正太郎『剣客商売 浮沈』 新潮文庫 1998) p.256 には、次のように述べられている。

『浮沈』は再読して、『剣客商売』の最後にふさわしい小説に思われた。登場人物の死が語られている。秋山小兵衛が九十三歳まで生きることには作者は三度も触れている。このうちの一箇所は、『浮沈』に収められている「深川十万坪」には次のような場面である。(p.18)

このあたりで、はなしを、秋山小兵衛六十六歳の天明四年(一七八四)秋に移したい。

この年の初夏、皆川石見守に関わる事件に巻き込まれた小兵衛は、二十番切りというはなれ業を仕てのけて、小兵衛を知る者を驚嘆させたことは前作〔二十番切り〕にのべておいた。

その当時、小兵衛は得体の知れぬ目眩に襲われて、  
(わしも、あの世へ行くときが切迫して来たようだな)  
おもったりしたが、暑い真夏を、どうやら無事に乗り切って、  
「先生は天狗さまだから、決して死ぬようなことはないのですよう」  
若い妻のおはるを安心させた。

おはるは、小兵衛より四十も年下で、健康そのもののような女であったが、あの世へ旅立ったのは、おはるのほうが先である。

何しろ小兵衛は、九十三歳の長寿をたもったのだから……。